原初史と救済史における
ルーアハ（rûaḥ）「風・息・霊」の用法

柊　　曉生

はじめに

旧約聖書の中で，名詞 רוּחַ（rûaḥ）「ルーアハ」[1] はヘブライ語で 378 回，アラム語で 11 回出て来る[2]。ただ，モーセ五書においては，レビ記には見当たらず[3]，申命記では 2 回だけである[4]。また，律法関係の文書にはほとんど出て来ないというのが特徴的である[5]。ルーアハは西セム語に共通する単語であり[6]，おそらく元来は擬音語[7] と考えられる女性名詞である[8]。

1　本稿では רוּחַ（rûaḥ）をルーアハと表記する。

2　H-J. Fabry, "רוּחַ rûaḥ" *TDOT*. vol. 13, 372 頁。R. Albertz/C. Westermann, "רוּחַ *rûaḥ* Geist" *THAT*. Bd II, 727. M. V. Van Pelt/W. C. Kaiser, Jr/D. I. Block, "8120 רוּחַ" *NIDOTTE*. vol.3, 1073 頁。アラム語はすべてダニエル書においてである。ダニ 2：35，4：5，6，15，5：11，12，14，20，6：4，7：2，15. そのうち 4 回は「聖なる神の霊」（4:6，15，5:11，14）という用法。

3　他に，オバデヤ書，ナホム書，ゼパニヤ書，ルツ記，雅歌，エステル記にも出て来ない。H-J. Fabry，前掲書 373 頁参照。H. W. ヴォルフが言うように，レビ記では בָּשָׂר（bāśār）「肉」が多く用いられている（61 回）。H. W. Wolff, *Antholopologie des Alten Testament*（München 1973）. 大串元亮訳『旧約聖書の人間論』（日本基督教団出版局 1983 年）79 頁。

4　申 2:30，34:9. モーセ五書全体においてのルーアハの用例は 38 回である。

5　R. Albertz/C. Westermann，前掲書 728 参照。

6　東セム語にはないが，類似の概念をあらわす単語はある。H-J. Fabry，前掲書 369 頁参照。

7　R. Albertz/C. Westermann，前掲書 727, H-J. Fabry，前掲書 367 頁参照。ギリシア語 πνέω（吹く），ドイツ語 Hauch（息），中国語「風」（fèng, fēng）なども擬音語と言われている。

ルーアハは風，息，霊などを基本的な意味として持つ単語である[9]。概して言えば，風は宇宙との関係，息は身体との関係，霊は神あるいは人，生物一般との関係である。ただルーアハは根本的には一つのもので，風も息も霊も，それらは密接に結びついていて切り離して考えることは出来ない。風と息がつながっていることは明白であり，空の風にせよ，人の息にせよ，単なる空気，気体ではなく目には見えないが，静止せずになんらかのかたちで動いている空気，働いている気体である。おそらくはそこからの意味の派生と考えられるが，霊もまた目には見えないが，何か不思議な働き，ある神秘的な力を持ったものとして理解される。吐く息，吸う息が人間の心的，霊的な精神のあり方に関係することは，ヨーガ，禅において実践されている。

ただ，ルーアハは風，息，霊などの他にも多くの意味を持つ単語であり，「口語訳聖書」を例にとって見れば，この名詞は24におよぶ日本語に翻訳されているということがわかる。「あなた*，怒り，息，憤り，命，いぶき，大風*，思い，害，風，気，元気，心，四方*，魂，西風*，八方，はやて，東風*，みずから*，みたま，むなしい，勇気，霊」[10]。

それでは，ヘブライ語ルーアハが七十人訳聖書（＝LXX）においてどのようなギリシア語に訳されているのかと言えば，大部分，おおよそ4分の3（264回）がπνεῦμα（プネウマ）である[11]。それは両者ともに意味概念に共通するところがあるからと考えられる[12]。そのほかにはἄνεμος「風」が約50回である以外は比較的少ない頻出度である[13]。

反対に，七十人訳のプネウマがどのようなヘブライ語から訳されているのかと言えば，ルーアハのほかには，נְשָׁמָה（nᵉshāmâ）「息」[14]，נִשְׁמָא

---

[8] ルーアハが女性名詞であることから，創1：2の創造的な霊を母としての神と解釈する考えもある。H-J. Fabry，前掲書401-402頁参照。ただ，ルーアハは男性名詞として用いられることもある（創6：3等）。ギリシア語πνεῦμα（プネウマ）は中性名詞，ラテン語のspiritusは男性名詞。こうした言語の性の相違に着眼したジェンダーの視点からの考察もある。

[9] R. Albertz/C. Westermann，前掲書728参照。ルーアハの意味は霊，息，風の順に多い。翻訳は蓋然的なものであって，たとえば風の翻訳に関して言えば，144回（J. H. Scheepers），113回（D. Lys），117回（C. A. Briggs）などと研究者によってその解釈は異なる。H-J. Fabry，前掲書373頁参照。

（nishᵉmā’）「息」[15]，קָדִים（qādîm）「東風」[16]，שָׁאַף（shā’ap）「あえぐ」[17]があるのみであり，七十人訳のプネウマはほとんどがルーアハの訳語であるということがわかる。

ルーアハは多義的な意味を持つ名詞であるが，本発表では特に原初史

10　『聖書語句大辞典』（教文館 1959）旧約聖書原語索引 51 頁。「訳語の右上端に星印*をつけたものは他の語と合成して，その訳語となることを示す。」同 1 頁。rūach［動］hiph. の訳語は「あう，受ける，かぎつける，かぐ，楽しみとする，和らぐ，喜ぶ」。またアラム語 rūach［名詞］の訳語は「風，かたくなになる*，みずから，霊」同 51 頁参照。ちなみにフランス語共同訳聖書 *Traduction Oecuménique de la Bible. Ancien Testament*（= TOB; Paris 1978）では 23 のフランス語に翻訳されている。Roûah（378 回）：139/160 esprit，97/111 vent，71/91 souffle，25/26 Esprit，5/285 côté，3/8 haleine，2/2 cardinal，2/2 moral，2/5 patience，2/14 animer，2/16 souffler，2/429 vie，1/1 animosité，1/2 humeur，1/2 rancoeur，1/4 inspiration，1/6 hostilité，1/7 air（élément），1/7 inspirer，1/7 passion，1/21 intention，1/25 tempête，1/521 coeur。*Concordance de la Traduction Oecuménique de la Bible*（Paris 2002）1109 頁。

11　R. Albertz/C. Westermann，前掲書 752-753。H-J. Fabry，前掲書 395 頁参照。

12　ヴルガタ訳聖書のラテン語 spiritus も同様である。

13　以下，ルーアハの LXX の訳語をアルファベト順に列挙する。αἷμα，ヨブ 6：4。ἀναπνέω，ヨブ 9：18。ἀνατολή，エゼ 42：16。ἄνεμος，出 10：13，13，19，14：21，サム下 22：11，代上 9：24，などほか多数。ἀνεμόφθορος，ホセ 8：7。ἀνήρ，箴言 17：22，18：14。δειλινός，創 3：8。ἐρίζω，創 26：35。ἡμέρα，サム上 1：15 。ἡσύχιος，イザ 66：2。θυμός，箴言 29：11，ヨブ 21：4，ゼカ 6：8，イザ 59：19，エゼ 39：29。κακοφροσύνη，箴言 16：18。μακρόθῡμος，箴言 17：27，コヘ 7：9。μέρος，エレ 52：23，エゼ 42：20。νοῦς，イザ 40：13。ὀλιγοψυχία，出 6：9，詩 54（55）：8。ὀλιγόψυχος，箴言 14：29，18：14，イザ 57：15，イザ 54：6。πνεῦμα，264 回。πνοή，箴言 1：23，11：13，イザ 38：16，エゼ 13：13。πνευματοφορέομαι，エレ 2：24。πραΰθυμος，箴言 16：19。σκυθρωπάζω，箴言 15：13。ταπεινόφρων，箴言 29：23。φρόνησις，ヨシュ 5：1。ψυχή，創 41：8，出 35：21。E. Hatch, H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint*（Graz 1954）参照。

14　王上 17：17，ヨブ 34：14，ダニ LXX. 10：17，ダニ TH. 10：17。

15　ダニ LXX. 5：23。

16　イザ 27：8。

17　詩 118（119）：131。

(創造と再創造)と救済史(エジプト脱出)に焦点を絞り，そこでルーアハが果たす役割についてテクストの共時的な観点から考察してみたい。

Ⅰ　創造と再創造におけるルーアハ
—創 1：2（祭司資料）と 8：1（祭司資料）—

(1) 創世記 1 章 2 節

וְהָאָרֶץ הָיְתָה תֹהוּ וָבֹהוּ וְחֹשֶׁךְ עַל־פְּנֵי תְהוֹם וְרוּחַ אֱלֹהִים מְרַחֶפֶת עַל־פְּנֵי הַמָּיִם׃

「地は混沌であって，闇が深淵の面にあり，神の霊が水の面を動いていた」[18]

①創世記 1 章 1 節は 7 語で記されており，続く 2 節は 7 語の倍数の 14 語で書かれている。2 節の最初は 1 節の最後の「天と地」の「地」を引き受けて,「ところで地は～」と地上世界の創造物語を開始する[19]。

②創 1：2 は次のような 3 文節で構成されている。

i）2 節 aα　地は混沌であり，　wəhāʾáreṣ hāyṯāʰ ṯōhû wāḇōhû

ii）2 節 aβ　闇が深淵の上にあり，　wəḥōšeḵ ʿal-pənê ṯəhôm

iii）2 節 b　神の霊が水の上を動いていた。

wərûʷḥ ʾĕlōhîm məraḥép̄eṯ ʿal-pənê ha-mmā́yim

2 節前半と 2 節後半は対立的に記述されている。前半は地が混沌(ṯōhû wāḇōhû）であり，闇が深淵の上にあったと述べ，創造以前の未だ形成されざる世界について記すが，後半はその世界に対して神のルーアハが働きかけ始めるという初動を רָחַף（rāḥap）ラハフの分詞（məraḥép̄eṯ）があらわしている。文学的構成について言えば，前半では，地が二詞一意の混沌（ṯōhû wāḇōhû）で説明され（動詞は hāyâ「ある」)，それを受け継いで闇が「深淵の上に」(ʿal-pənê ṯəhôm）と言われる。後半では，その暗い不分明な状況に対し，神のルーアハが登場し，「水面の上に」(ʿal-pənê ha-mmā́yim）働きかける。2 節前半 β の主語「闇」と 2 節後

18　聖書の引用は基本的には『聖書　新共同訳』（日本聖書協会）を使用。

19　ここでの接続詞 וְ（wᵉ）「そして」は離接的用法。G. J. Wenham, *Genesis 1-15*（WBC; Texas 1987）15 頁参照。

半の主語「神のルーアハ」は対立的な意味を持っていると考えられるが，両者の述語には同じ「～の上に」（ʿal-pənê）があり，「深淵」と「水」は何らかの関係で同義的な意味を持つと考えられる。

③さて，2節後半を理解する上で重要なのは分詞 מְרַחֶפֶת（məraḥép̄eṯ）「空中に舞う，ただよう」である[20]。この動詞 רָחַף（rāḥap）は旧約の中では強意形（piel）で2回，創1：2と申32：11にあるのみである[21]。申32：11には次のように書かれている。「鷲が巣を揺り動かし／雛の上を飛びかけり／羽を広げて捕らえ／翼に乗せて運ぶように」[22]。

ⅰ）申命記32章には「モーセの歌」と言われる詩文が1節から44節までに記載されている。1-6節の天地へのよびかけに始まる言葉に続き，7-14節は神のイスラエルの民に対する恩恵を記述する。10節には「主は荒れ野で彼を見いだし／獣のほえる不毛の地でこれを見つけ／これを囲い，いたわり／御自分のひとみのように守られた」とあるが，この節の「荒れ野」בְּאֶרֶץ מִדְבָּר（bəʾéreṣ miḏbār）と「不毛の地」וּבְתֹהוּ（ûḇəṯōhû）は同義語で[23]，後者の単語 תֹּהוּ（ṯōhû）「トーフー」は創1：2で使われている「混沌」תֹּהוּ וָבֹהוּ（ṯōhû wāḇōhû）の前半の一語である。神がイスラエルの民を見つけ，とり囲み，いたわり，最後には自分の目の中に入れても痛くないというように守るとの10節の言葉を受け，11節は鷲の比喩で，いかにその民を大切にするかを述べている。

ⅱ）申32：11は前半6語，後半6語，さらにそれぞれ3語ずつで前後に分かれる4文節で構成されている。

前半：α　鷲が巣を揺り動かし，　β　雛の上にを飛びかけり，
後半：α　羽を広げて捕らえ，　β　翼の上に乗せて運ぶように。

前半は，鷲が主語，巣と雛が目的語となり，鷲が巣を「揺り動かし」雛の上に「飛びかける」。後半は，羽と翼が主語となり，羽を「広げて」

20　「おおっていた」（口語訳），「吹きまくっていた」（関根正雄訳），「働きかけていた」（月本昭男訳）。

21　カル形（qal）でエレ23：9。*HAL* Bd. 2, 1137-1138頁参照。但し，*BDB* は רָחַף I（rāḥap）エレ23:9と רָחַף II（rāḥap）を区別する。同書934頁参照。

22　「わしがその巣のひなを呼び起し，／その子の上に舞いかけり，／その羽をひろげて彼らをのせ，／そのつばさの上にこれを負うように」（口語訳）。

23　口語訳は「荒れ野」（bəʾéreṣ miḏbār.）と「荒れ地」（ûḇəṯōhû）と訳す。

彼（雛）を「取り」，翼の上に「(乗せ）上げる」。前半には，鷲が能動的に最初は「巣」という外から，次にはその内にいる「雛」に働きかけるという第1の発展段階があり，後半には，最初は「羽」を広げ，雛を取り，雛を「翼」の上に乗せ上げるという第2の発展段階がある。

iii）申32：11の動詞について見ると，前半には2動詞が，後半には3動詞がある。前半には先に עוּר I（ʿûr）「呼び覚ます」があり，次いで רָחַף II（rāḥap）「空中に舞う」が文末にあるが，後半にはまず最初に動詞 פָּרַשׂ（pāraś）「広げる」があるので，前半の最後と後半の最初は動詞で連結されているということになる。さらに後半 α の最後の動詞 לָקַח（lāqaḥ）「取る」は3人称代名詞語尾を持っているが，後半 β の最初の動詞 נָשָׂא（nāśāʾ）「(乗せ）上げる」もまた3人称代名詞語尾を持っており，後半 α の最後と後半 β の最初は同じ文法的形態で連鎖しているということになる。

iv）動詞 רָחַף II（rāḥap）「空中に舞う」はここでは עוּר I（ʿûr）「呼び覚ます」に続く動詞として意味上の連続性があるものと考えられる。鷲はまずその巣を呼び起こし（揺り動かし），それから巣の中の雛の上に舞いかける（飛びかける）。親が子に対して働きかけるという養育の行為である。また，前半 β と後半 β には前置詞「～の上に」（ʿal-）があり，パラレルとなっている。

前半β＝その雛の上に（ʿal-gôzālāyw ）＋飛びかける（yəraḥēp）
後半β＝乗せ上げる（yiśśāʾêhû）＋その翼の上に（ʿal-ʾebrāṯô）

④さて，創1：2と申32：10-11を比較してみると，ｉ）創1：2には תֹהוּ וָבֹהוּ（ṯōhû wāḇōhû）があり，申32:10には תֹהוּ（ṯōhû）がある。ii）創1:2には「深淵の上に」と「水面の上に」があり，申32:11には「その雛の上に」と「その翼の上に」がある。両者ともに前置詞 עַל（ʿal）「～の上に」がある。iii）創1：2では動詞 רָחַף II（rāḥap）「空中に舞う」が前置詞 עַל（ʿal）「～の上に」の前にあり，申32：11では動詞 רָחַף II（rāḥap）「空中に舞う」が前置詞 עַל（ʿal）「～の上に」の後にある。

創　1：　2 ＝ 働きかける（rāḥap）＋水の面の上に（ʿal）（ṯōhû wāḇōhû）
申32：11 ＝ その雛の上に（ʿal）＋舞いかける（rāḥap）（ṯōhû）（10節）

申32：11の鷲は不毛の砂漠における神の現存を比喩的に表現し[24]，神がその民を大切に保護し育成することを言っている。他方，創1：2

の神のルーアハは茫漠とした地上世界に闇が深淵の上にあったその時，世界創造のために水の上に働きかけはじめるのである。鷲はすでにその雛を産んでいるが，これからは自分の子として育てようとその上を飛びまわり，神のルーアハはこれから世界を創造しようとして水の上に働きかける[25]。鳥が風に乗って飛びまわることから鳥と風とは関係するので，その意味から神のルーアハを神の風と理解することも可能である[26]。

⑤創1：2の「神のルーアハ」の一般的な翻訳は「神の霊」であるが，NRSV，TNK（JPS），BJなどは「神の風」と訳す。関根正雄氏は「神の霊風」と訳し，「『霊風』の原語はルーアハが風をも霊をも意味することギリシア語における πνεῦμα と同じ」とその注で記されている[27]。

目に見えない闇の世界に対して，目に見えない力である神の霊が働きかけて創造の最初の一歩が始まる。闇も霊も見えない世界で共通するが，霊には働きかける力がある。そこで神が「光あれ」との第一声を発せられるのであるが，それは闇に対立するものとしての光である。言葉もまた見えない音声であり，それは口から発せられ，息と関係するところのものでもある。言葉を発する前にルーアハが言われているのは理に適ったことで[28]，その意味において，フランス語共同訳聖書TOBが「神の息」と訳しているのも首肯できることである。ルーアハは風，息，霊などの意味を合わせ持つもので，一語に翻訳すると他の意味が切り捨てられてしまうことになるが，はじめに世界に働きかける神のルーアハは，神の動的な力としての霊と考えるのがよいのではないかと思われる。

24　M. V. Van Pelt/W. C. Kaiser, “8173 רוּחַ” *NIDOTE*. vol. 3, 1098頁参照。

25　M. V. Van Pelt/W. C. Kaiserは，一方を宇宙の創造，他方を民の創造と解釈する。前掲書同頁注参照。

26　創1章の天地創造における自然界の用語（光と闇，水と空，海と陸など）の文脈の中で考えればルーアハを「風」と解釈することも出来るであろう。アモス4：13には次のような言葉がある。「見よ，神は山々を造り／風を創造し／その計画を人に告げ／暗闇を変えて曙とし／地の聖なる高台を踏み越えられる」。

27　関根正雄『創世記』（岩波文庫　昭和31年，昭和49年）9頁，157頁参照。

28　ルーアハと言葉との関係について，L. Ska, *Le passage de la mer*（Rome 1986）108頁参照。順序は逆（言葉→ルーアハ）ではあるが，詩33：6-7でも同様のことが言われている。

(2) 創世記 8 章 1 節

וַיִּזְכֹּר אֱלֹהִים׳ אֶת־נֹחַ וְאֵת כָּל־חַיָּה׳ וְאֶת־כָּל־הַבְּהֵמָה וַיַּעֲבֵר אֱלֹהִים רוּחַ׳ עַל־הָאָרֶץ וַיָּשֹׁכּוּ הַמָּיִם׃

「神は，ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め，地の上に風を吹かせられたので，水が減り始めた」

①ノアの物語は，第 1 部の「洪水」（創 6：5−8：22）と第 2 部の「祝福と契約」（9：1-17, 28-29）とから成り立っているが，第 1 部の洪水物語の中心は，共時的な観点から言えば創 8：1 にあり，そこがちょうど洪水物語の転換点となっている[29]。すべてのものを滅ぼし尽くす洪水ではあるが，神はノアと彼とともにいた獣や家畜を忘れずに（ザカル），ルーアハを地の上に吹き渡らせられる。こうして水が引きはじめるのである。

ところで，7 章の終わり，すなわち創 8：1 の前節である創 7：24 には「水は 150 日間，地の上で増強した」とあり，それに続く創 8：1 にも「水」と「地の上」がインクルジオとしてあり，水に関係する動詞 גָּבַר（gābar）「増強する」（創 7：24）と שָׁכַךְ（shākak）「（洪水などが）減少する」（創 8：1）[30] とは意味的に対立する動詞であって，創 7：24 と創 8：1 とはキアスムスの形式で深く結びついている。

創 7：24　(A)　水が増強する（wayyigbərû hammáyim）
　　(B)　地の上に（ʿal-hāʾáreṣ）
創 8：1　　(A’) 地の上に（ʿal-hāʾáreṣ）
　　(B’) 水が減少する（wayyāšōkkû hammáyim）

創 7：24 では水が主語となり，地の上に増水することが言われているのに対し，創 8：1 では神のルーアハが主語となり，それが地の上に吹き渡らせられ，その結果水が引くことになると述べられている。

②洪水物語の転換点である創 8：1 は次のような 3 文節で構成されて

---

[29] G. J. Wenham, “The Coherence of the Flood narrative.” *VT*28（1978）338 頁，Genesis 1-15（WBC; 1987）156 頁，B. W. Anderson, “from Analysis to Synthesis” *JBL*97（1978）38 頁参照。

[30] この動詞は旧約聖書の中で 5 回使われている。4 回はカル形（qal）。創 8：1，エレ 5：26，エス 2：1，7：10。1 回は使役形（hif）民 17：20。

いる。

ⅰ）神はノアと，箱舟の中にいたすべての生き物と，すべての家畜とを心にとめられた。

ⅱ）神は風を地の上に吹かせられた。

ⅲ）水は退いた。

創 8：1 の 3 文節は，神が主語の 2 文節と，水が主語の 1 文節に分かれる。

ⅰ）主語「神」　動詞「思い起こす」　wayyizkōr ʾĕlōhîm

ⅱ）主語「神」　動詞「吹き渡らせる」　wayyaʿăḇēr ʾĕlōhîm

ⅲ）主語「水」　動詞「引く」　wayyāšŏkkû hammā́yim

動詞 זָכַר（zākar）「思い起こす」は旧約聖書中ここがはじめての用例である[31]。創 9：15，16 では契約を思い起すと言われており，それはエジプト脱出の時においても神がモーセに言われることであるが（出 2：24，6：5），ここでは具体的に，ノアと彼と共にいた獣，家畜と言われている。動詞ザカルは創世記ではこの先アブラハム（創 19：29），ラケル（創 30：22）[32] と個人に用いられており[33]，この動詞は神が何らかの救いの行動を起す前に使われているということがわかる[34]。

③「神は地の上にルーアハを吹き渡らせた」

（wayyaʿăḇēr ʾĕlōhîm ʿal-hāʾā́reṣ）

ⅰ）神はノアや獣，家畜を心に留め，次に風を「（吹き）渡らせる」という行為に出る。それによって水を引かせるわけである。ここで「（吹き）渡らせる」と訳した動詞は עָבַר（ʿăbar）「通り過ぎる」の使役形（hif）

---

[31] G. J. Wenham, *Genesis 1-15*（Texas 1987）184頁参照。“זָכַר（zākhar）” *TDOT* vol. 4, 64-82 頁参照。

[32] 創 21：1 のサラの場合には動詞 פָּקַד（pāqad）「顧みる」が使われており，子供を身ごもり，産んだという点においてラケルの場合には זָכַר（zākar）「思い起こす」がそれと同様の意味を持つ。Cassuto 前掲書 100 頁参照。V. P. Hamilton, *The Book of Genesis Chapters 1-17*（Michigan 1990）299 頁参照。

[33] 神が主語である場合，前置詞は לְ（lᵉ）が 18 回であるが，創 19：29；30：22 は 創 8：1 と同様に前置詞 אֵת（ʾēt）「～を」である。V. P. Hamilton, 前掲書 299 頁参照。

[34] C. Westermann，前掲書 592-593 頁参照。

であるが，この動詞の使役形（hif）がルーアハとともに用いられている用例はない。ただ，詩篇 103：16 にはルーアハが עָבַר（ʿăbar）のカル形（qal）とともに使われている例がある。「風がその上に吹けば–כִּי רוּחַ עָבְרָה־בּוֹ（kî rûʰḥ ʿāḇrāʰ-bô）–，消えうせ／生えていた所を知る者もなくなる」。ここでは風が主語であり，風が草や花の上を通り過ぎればそれらは消えてなくなるという。それに対し，創 8:1 では神が主語であり，ルーアハ（風）を地の上に通り過ぎさせれば（吹き渡らせれば），水はなくなるというのである。

ii）עָבַר（ʿăbar）「通り過ぎる」の使役形が神を主語として持つ箇所の中で[35]，水との関係で言えば，「イスラエルにその中（葦の海）を通らせた（ʿăbar）方に感謝せよ」という詩 136：14 や[36]，「海を開いて彼らを渡らせる（ʿăbar）間，水をせきとめておかれた」という詩 78：13，あるいは，神がイスラエルの民にヨルダン川を渡らせる（ʿăbar）というヨシュ 7：7[37] などの例がある。葦の海とヨルダン川を「通り過ぎる」という救済史の出来事は，原初史での洪水における風の通過と関係しているとも考えられる。「通り過ぎる」ことによる救いである。

iii）ルーアハ（風）が עָבַר（ʿăbar）の使役形と一緒に用いられるような意味と同様な箇所は旧約聖書の中にいくつかある。「（神は）天の四隅

---

[35] 神が主語としての箇所は次の通りである。出 33：19，ヨシュ 7：7，サム下 12：13，24：10，エレ 15：14，エゼ 14：15，20：37，37：2，ゼカ 13：2，詩 78：13，119：37，39，136：14，ヨブ 7：21，代上 21：8。

[36] 動詞 עָבַר（ʿăbar）のカル形（qal）が古い「海の歌」では使われている。「主よ，あなたの民が通り過ぎ／あなたの買い取られた民が通り過ぎるまで」（出 15：16）。

[37] ヨルダン川を渡ることに関し，動詞 עָבַר（ʿăbar）のカル形（qal）は次のように多用されている。ヨシュ 1：2，11，14，2：23，3：1，6，11，14，16，17，17，4：1，7，10，11，22，23，23，5：1[Q]。これは特別な神学的意味があってのことである。同じ動詞でありながら意味の異なる用法（ヨシュ 1：11，3：2，4，4：5，11，12，13）もある。祭司資料のみが海を渡ることと関係づけ，動詞はヨシュ 3-5 で בּוֹא（bôʾ）「行く」，あるいは הָלַךְ（hālak）「行く」を用いている。H. F. Fuhs, “עָבַר（ʿăḇar~）” *TDOT* vol. X, 419-420 頁参照。H-P. Stähli, “עבר *ʿbr* vorüber-,hinübergehen” *THAT* Band II, 200-204 参照。Allan. M. Harman, “6296 עבר” *NIDOTE* vol. 3, 314-316 頁参照。

から，四方の風を吹きかける」（エレ 49:36，動詞 בוֹא〔bôʾ〕の使役形），「激しい風をおこす」（エゼ 13：13，動詞 בָּקַע〔bāqaʿ〕の強意形），「神が息（風）を吹きかけられれば流れる水となる」（詩 147：18，動詞 נָשַׁב〔nāšb〕の使役形）[38]。

神は風を創造し（アモ 4：13），風を倉から送り出される（エレ 10：13 ＝ 51：16 ＝詩 135：7）。風を己れの使者とし（詩 104：4），風を測って送り出す（ヨブ 28：25）。その手の内に風を集め（箴 30：4），激しい風は神の言葉を成し遂げる（詩 148：8）。

iv）創 8：1 の動詞 עָבַר（ʿăbar）「通り過ぎる」の使役形の意味は明白ではないが，それを理解するためには出 33：18-23 の「主の栄光」の箇所が参考になるのではないかと考えられる。出 33：19 には「主は言われた。『わたしはあなたの前にすべてのわたしの善い賜物を通らせ－עָבַר（ʿăbar の使役形）－，あなたの前に主という名を宣言する。わたしは恵もうとする者を恵み，憐れもうとする者を憐れむ』」と言われており，20 節では「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て，なお生きていることはできないからである」とあって神が見ることのできない存在であると強調されている。そして 22 節では「わが栄光が通り過ぎる－עָבַר（ʿăbar のカル形）－とき，わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ，わたしが通り過ぎる－עָבַר（ʿăbar のカル形）－まで，わたしの手であなたを覆う」と動詞 עָבַר（ʿăbar のカル形）が使われ，目に見えない神の通過を言いあらわしている。最後に 23 節で「わたしが手を離すとき，あなたはわたしの後ろを見るが，わたしの顔は見えない」と神の不可視性をさらに繰り返し力説している。

このシナイの山での主の栄光の通過の記事は[39]，洪水のときに神が風を吹き渡らせる，通過させるという記述と同じような意味合いを持つものではないか。すなわち，創 8:1 では神自体ではなく，神がつかわす風，神が通り過ぎさせる風であるが，それはいわば目に見えない神の本性で

---

[38] その他，イザ 27：8，詩 107：25，ヨナ 1：4，4：8，エレ 4：12，民 11：31，エゼ 13：11，13 参照。R. Albertz/C. Westermann，前掲書 732 参照。

[39] 王上 19：11 でもホレブ山での神の顕現が動詞 עָבַר（ʿăbar）のカル形で言われている。

あると考えられるのである。創 8：1 の動詞 עָבַר（ʻăbar）の用法には，葦の海とヨルダン川の渡渉，及びシナイ山での不可視の神の通過ということが神学的な背景としてあるのではないかと考えられる。

まとめ-創 1：2 と創 8：1-

創 1：2　　創造＝神の霊が＋吹きかける[40]＋水の面の上に
創 8：1　再創造＝吹き渡らせる[41]＋神が＋風を＋地の上に

創 1：2 の「神の霊」は，創 1：1 の主語である「神」に続いて登場し，創 1：3 の「神は言われた」という「神の言葉」の前であるので，ある意味において創造に先立つ存在であるということが出来る[42]。創 8：1 の「神」が吹き渡らせられる「風」は，あらたな創造のために神がつかわされ，その使命を果たす存在として登場する。創 1：2 の創造においても，創 8：1 の再創造においてもルーアハが使われているのは，その意味合いが少しく異なるにせよ，世界の創造のはじめと壊れた世界の再創造のはじめに働く神の動的な力をあらわすためであると考えられる。

Ⅱ　ノアの洪水における人間と動物のルーアハ
―創 6：3（ヤーヴィスト）＋創 6：17 と創 7：15（祭司資料）―

（1）創世記 6 章 3 節

וַיֹּאמֶר יְהוָה לֹא־יָדוֹן רוּחִי בָאָדָם לְעֹלָם בְּשַׁגַּם הוּא בָשָׂר וְהָיוּ יָמָיו מֵאָה וְעֶשְׂרִים שָׁנָה׃
「主は言われた。『わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉にすぎないのだから。』こうして，人の一生は百二十年となった」

①　洪水物語が厳密な意味で始まる前の創 6：1-4 には「神々の子らと巨人たち」という神話的な物語が挿入されている[43]。そこでは，神々のむすこたちと人間のむすめたちの結婚がテーマとなっており，その 3

40　女性単数分詞。
41　男性単数 3 人称。
42　“preexistent”. H-J. Fabry，前掲書 381 頁参照。

節で神は「わたしの霊（ルーアハ）は人の中に永久にとどまるべきではない」と言われる。これは人間の中に神の霊が本来的には宿っているということ，人間には神の息（ルーアハ）がかかっているということが前提とされている[44]。

1節では「地上に人が増え始め」とあり，5節では「地上に人の悪が増え」とあり，人の増大と悪の増大が呼応するかたちで1-4節と5-8節のそれぞれの単元は始まっている。また，3節では「主は言われた」とあり，7節にも「主は言われた」とあり[45]，人間に対する否定的な神の言葉が発展的に記されている。文章表現の上からも意味内容の上からも，創6：1-4のペリコペーは創6：5-8のノアの洪水物語の導入部分と深く結びついて構成されている。

②創6：3には「主は言われた」という導入の言葉に続いて神の言葉が13語で記されている。

ⅰ）6：3aα（2語）主は言われた。
ⅱ）6：3aβ（5語）わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。
ⅲ）6：3aγ（3語）人は肉にすぎないのだから。
ⅳ）6：3b　（5語）こうして，人の一生は百二十年となった。

神の言葉はⅱ）とⅳ）がそれぞれ5語ずつで記されており，ⅱ）は否定文，ⅳ）は肯定文であって[46]，意味論的に対応していると考えられる。神の霊が人の中に永久にとどまらないのであるから，人間は120年という生命の限定を受けるということである[47]。それは霊と肉との分離に関

43　G. von Radは「天使の結婚」（Engelehen）と題する。*Das Erste Buch Mose/Genesis*（ATD; Göttingen, Zürich 1949, [12]1987）83頁。

44　創2：7には「命の息」が吹き込まれたと言われている。ただ，これは נִשְׁמַת חַיִּים（nišmaṯ ḥayyîm）であって，ルーアハが使われているわけではない。本稿では נְשָׁמָה（nᵉshāmâ）に関連する創2：7や，創7：22については言及しない。

45　この「主は言われた」は誰かに語るものではなく，神の決定を言う。会話の導入ではなく，創3：22と同様，神の考えを述べるものである。U. Cassuto, *A Commentary on the Book of Genesis I*（Jerusalem 1949, 1984）295頁，C. Westermann，前掲書504頁，G. J. Wenham，前掲書141頁参照。

46　C. Westermann，前掲書505頁参照。

47　モーセの生涯は120年（申31：2，34：7）。

係する[48]。真中のiii）で，彼（人間）はבָּשָׂר（bāśār）「肉」に過ぎないのだからと言われている。בָּשָׂר（bāśār）「肉」は創2:23で「私の肉の肉」，続く創2：24で「一つの肉」と，「骨と肉」（創2：23），「男と女」（創2：24）の関係で述べられており，この単語が次に出て来るのはノアの洪水物語においてである。創6-9章にかけては14回と多く出て来る[49]。それは洪水においての人間と動物の「生と死」，または「肉と血」に関係するからであるが，最初には人間のあり方が「霊と肉」の関係で述べられている。神の霊がある限り人は生き続け，それが取り去られれば，単なる肉となって朽ち果てるということである。ヨブ34：14-15には「もし神が御自分にのみ，御心を留め／その霊と息吹（rûḥô wənišmāṯô）を御自分に集められるなら／生きとし生けるものは直ちに息絶え／人間も塵に返るだろう」とある。

③ii）の6:3a βで，「私の霊は人の中に永久にとどまるべきではない」と言われているが，多くの注解者が言うように，ここでの「永久に」לְעֹלָם（lə^{c}ōlām）は[50]，創3：22の「永遠に生きる者」וְחַי לְעֹלָם（wāḥay lə^{c}ōlām）と関係するであろう。すなわち，創3：22では「主なる神は言われた。『人は我々の一人のように，善悪を知る者となった。今は，手を伸ばして命の木からも取って食べ，永遠に生きる者となるおそれがある』」。ただ，創3：22では命の木から取って食べれば永遠に生きるおそれがあると肯定的に言われているが，創6：3では神の霊が人の中には永遠にはとどまらないであろうと否定的に述べられているという違いはある。永遠に生きることが一方では木の実を食べることと関係し，他方では神の霊との関係で言われている。

④「わたしの霊」רוּחִי（rûḥî）は旧約聖書中，創6：3以外はすべて預

---

48 ルーアハがבָּשָׂר（bāśār）「肉」に及ぼす影響はヨブ4：15においても言われている。「風が顔をかすめてゆき／身の毛がよだった。」。ルーアハが文頭にあり，בָּשָׂר（bāśār）「肉」が文末にある。ルーアハ（基本的には女性名詞）を受ける動詞חָלַף（ḥālap）は創6:3の動詞と同じく男性3人称単数である。V. P. Hamilton，前掲書267頁参照。

49 創6:3, 12, 13, 17, 19, 7:15, 16, 21, 8:17, 9:4, 11, 15, 16, 17。

50 לֹא־לְעֹלָם（lōʾ- lə^{c}ōlām）「永久に～ない」の用例はエレ3：12，哀3：31にもある。J. Skinner, *Genesis*（ICC; Edinburgh 1910, 1980）143頁参照。

言書，諸書の中に見出される[51]。但し，すべてが神の霊であるというわけではなく，詩編およびヨブ記のすべての箇所は人間の霊，息であり，他にイザ26：9，38：16，ダニ2：3が人間に関して私の霊と言われている。ヨブ17：1では「息（rûḥî）は絶え，人生の日は尽きる。わたしには墓があるばかり」と記され[52]，人間の息と生命の関係が述べられている。

他方ハガ2：5では，エジプト脱出時の約束の言葉として「わたしの霊はお前たちの中にとどまっている（עָמַד [ʿāmad] の女性分詞）。恐れてはならない」と言われており，創6：3とは対照的である。また，人間の創造と関係するのはイザ44：3で，「あなたの子孫にわたしの霊をそそぎ，あなたの末にわたしの祝福を与える」と言われており，ここでは「私の霊」と「私の祝福」が対となっている。

⑤エゼ37章には「枯れた骨の復活」の記事があるが，この箇所は創6：3の「私の霊」を理解する上で重要な意味を持っていると考えられる。「見よ，わたしはお前たちの中に霊を吹き込む（ʾănî mēḇîʾ ḇāḵem rûʰḥ）。すると，お前たちは生き返る（wiḥyîṯem）」（5節）。「わたしは，お前たちの上に筋をおき，肉を付け，皮膚で覆い，霊を吹き込む（wənāṯattî ḇāḵem rûʰḥ）。すると，お前たちは生き返る（wiḥyîṯem）」（6節）。「わたしが見ていると，見よ，それらの骨の上に筋と肉が生じ，皮膚がその上をすっかり覆った。しかし，その中に霊はなかった（wərûʰḥ ʾên bāhem）」（8節）。「霊よ（hārûʰḥ），四方から吹き来れ。霊よ，これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る（wəyiḥyû）」（9節），「わたしは命じられたように預言した。すると，霊が彼らの中に入り（wattāḇôʾ ḇāhem hārûʰḥ），彼らは生き返って（wayyiḥyû）自分の足で立った」（10節）。「また，わたしがお前たちの中に私の霊を吹き込むと（wənāṯattî rûḥî ḇāḵem），お前たちは生きる（wiḥyîṯem）」（14節）。

エゼ37章でルーアハは9回[53]，動詞「生きる」はそれとともに5回[54]

---

[51] 創6：3以外，イザ6回，エゼ4回，ヨエ2回，ハガ1回，ゼカ2回，詩6回，ヨブ7回，箴1回，ダニ1回，合計31回。

[52] 「わが霊は破れ，わが日は尽き，／墓はわたしを待っている」（口語訳）。

使われている。רוּחִי（rûḥî）「私の霊」は 14 節，בָּשָׂר（bāśār）「肉」は 6，8 節においてしか用いられてはいないが，神のルーアハが人間を生かすという意味において創 6：3 と同じで用法あると考えられる。息（イキ）は生きる（イキル）と関係するが，神のルーアハ（霊＝息）が根源的な働きをすると考えていいだろう。

（2）と（3）רוּחַ חַיִּים（rûªḥ ḥayyîm）「命の息（霊）」[55]
―創世記 6 章 17 節（祭司資料）と創世記 7 章 15 節（祭司資料）―

（2）創世記 6 章 17 節

וַאֲנִי הִנְנִי מֵבִיא אֶת־הַמַּבּוּל מַיִם עַל־הָאָרֶץ לְשַׁחֵת
כָּל־בָּשָׂר אֲשֶׁר־בּוֹ רוּחַ חַיִּים מִתַּחַת הַשָּׁמָיִם כֹּל אֲשֶׁר־בָּאָרֶץ יִגְוָע ׃

「見よ，わたしは地上に洪水をもたらし，命の霊をもつ，すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える」

①創 6：17 は，洪水以前におけるノアに対する神の言葉（創 6：13-21）中の一節である。洪水以前，創 6：3，7 の「主は言われた」で始まる神の言葉は語りかける相手を持たない神自身の意思表明であったが，創 6：13 の「神はノアに言われた」，7：1 の「主はノアに言われた」で始まる神の言葉は，話しかける対象としてノアを持つ。

創 6：13　神はノアに言われた。
創 6：22　ノアは，すべて神が命じられたとおりに果たした。
創 7：　1　主はノアに言われた。
創 7：　5　ノアは，すべて主が命じられたとおりにした。

②創 6：17 は，箱舟の製作に対する指示（創 6：14-16）のあとに続く言葉であるが，創 6：13 の「神はノアに言われた」で始まる最初の言葉（創 6：13）と呼応している。創 6：13-21 における神の言葉の前半

53　エゼ 37：1，5，6，8，9，9，9，10，14。
54　エゼ 37：5，6，9，10，14。他に単独で 3 節に用いられている。
55　「命の息」は「口語訳聖書」，「命の霊」は「新共同訳聖書」。筆者は「命の息」と解釈する。

は以下のとおりである。

6：13　（A）見よ，すべて肉なるもの，地，滅ぼす，来る。

6：14-16　（B）箱舟の製作指示。

6：17　（A'）見よ，すべて肉なるもの，地，滅ぼす，来る。

③創 6：17 は次のような 3 文節から構成されている。

i）私は地の上に（ʿal-hāʾāreṣ）水の洪水を来たらせる[56]。

ii）その中に命の息があるすべての肉なるもの（kol-bāśār ʾăšer）を天の下から滅ぼすために。

iii）地にある（bāʾāreṣ）すべてのもの（kōl ʾăšer）は息絶える。

まず第 1 に，17 節の初めの文節に「地の上に」があり，終りの文節に「地に」があって，17 節の枠組を形成している[57]。次に，その地に対して第 2 文節の終りでは「天の下から」と天があり，天と地，世界の全体を示唆している。さらに，第 2 文節前半の「すべての肉なるもの」と第 3 文節の「すべてのもの」が同義的な意味を持つものとして繰り返し強調され，それぞれについている動詞が前者は「滅ぼす」，後者は「息絶える」で，やはり同義的な動詞が使われている。

(3) 創世記 7 章 15 節

וַיָּבֹאוּ אֶל־נֹחַ אֶל־הַתֵּבָה שְׁנַיִם שְׁנַיִם מִכָּל־הַבָּשָׂר אֲשֶׁר־בּוֹ רוּחַ חַיִּים׃

「命の霊をもつ肉なるものは，二つずつノアのもとに来て箱舟に入った」

①創 7：1-4 ではノアに対する主の言葉が書かれ，5 節ではそれに対するノアの実行が記されている。続く創 7：6-24 では，洪水が実際に起こり，ノアとその家族や動物が箱舟に入り，洪水がすべてのものを覆うことが述べられている。創 7：15 はこの中での第 1 段落（創 7：6-9）に続く第 2 段落（創 7：11-16 節）にある記述である。

②創 7：15「箱舟に入る」

---

[56] 創 6:17 の第 1 文節については，拙稿 "heqîm b^{e}rît-dans le cas de Noé (P), comparé à heqîm dābār–" *AJBI* 20（1994）9-21 頁参照。

[57] 七十人訳（LXX）では ἐπὶ τὴν γῆν と ἐπὶ τῆς γῆς。ヴルガタ訳（Vg）では super terram と in terra。

ⅰ）動詞「入る」は7，9，13，15，16，16節で使われており，箱舟に入ることの重要性が語られている。「箱舟に」は7，9，13，15節で，常に動詞「入る」と一緒であるが，15節同様，「ノアに」とともにあるのは9節である。

9節＝二匹ずつ＋入る＋ノアに＋箱舟に＋雄と雌

15節＝入る＋ノアに＋箱舟に＋二匹ずつ＋命の霊をもつすべての肉なるもの（の中）から

16節＝入る（分詞）＋雄と雌＋すべての肉なるもの（の中）から＋入る＋

ⅱ）箱舟に入るものは，7節では（1）ノア，(2）子供たち，(3）妻，(4）子供たちの妻たちの人間，8節では（1）清い動物，(2）清くない動物，(3）鳥，（4）地を這うものすべての動物が挙げられており，9節でそれらをまとめるかたちで「二匹ずつ」と言われている。創7：13ではノアとその家族が箱舟に入ったと言われているが，14-15節では，人間のみならず動物たちも箱舟に入ることが付け加えられて述べられている。14節では「すべての」が6回使われ，「それぞれの種類」が4回用いられており，15節で14節の動物たちがまとめられたかたちで，「二匹ずつ」と言われている[58]。

(A)　7節＝1）ノア，2）子供たち，3）妻，4）子供たちの妻たち
　　8節＝1）清い動物，2）清くない動物，3）鳥，4）地を這うもの

(B)　9節＝「二匹ずつ」

(A'）14節＝「すべての」が6回，「それぞれの種類」が4回

(B'）15節＝「二匹ずつ」

ⅲ）9節と15節（＋16節）の比較

9節では最初に二匹ずつと言われ，それらがノアに（「～に」前置詞ʾel），箱舟に（「～に」前置詞ʾel）入ったと述べられ，それからそれらがすなわち雄と雌であると説明されている。他方，15節では最初にノアに（ʾel），箱舟に（ʾel）入ったと言われてから，入ったのは二匹ずつであって，それらは「その中に命の息（霊）があるすべての肉なるもの

58　ここでは創6：18-20の人間，動物に関してはふれない。

うちから」と説明され，16節になってさらに詳しく「すべての肉なるもののうちから雄と雌」と解説されている。15節の「すべての肉なるもののうちから二匹ずつ」と16節の「すべての肉なるもののうちから雄と雌」は対応し，「二匹ずつ」が「雄と雌」であるということがわかる[59]。

まとめ-創6：17と創7：15-

創6：17　kol-bāśār ʾăšer-bô rûᵃḥ ḥayyîm
創7：15　mikkol-habbāśār ʾăšer-bô rûᵃḥ ḥayyîm

1）動詞בּוֹא（bôʾ）「来る，入る」が，創6：17では神（私）を主語として使役形分詞で洪水を「来たらせる」という意味で使われているのに対し，創7：15-16では人間，動物が箱舟に「入る」という意味で3人称複数形が3回用いられている[60]。

2）創6：17は「命の息（霊）を持つすべての肉なるもの」を「滅ぼすため」，創7：15は「命の息（霊）を持つすべての肉なるもの」を救うためという違いがある。後者では「ノアに」,「箱舟に」と前置詞「～に」（ʾel）が2回繰り返されて強調されている。

3）創7:15には「肉」の前に冠詞があり,「すべての」の前に前置詞「～から」がある。それは創6：17と違い,「すべての肉なるもの」に限定を付け加えているということである。その限定とは，「二匹ずつ」，すなわち「雄と雌」である。

4）創6:17以下の18-20節でも「二匹ずつ」,「雄と雌」は言われており,「すべて命あるものから」,「すべての肉なるものから」と結びつけて述べられてはいるが,「命の息（霊）」とは結ばれていない。おそらく，創7：15は創6：17以下の18-20節を整理統合して記述したものと思われる。

59　地上の動物に関して，「すべての肉なるもの」は21節でも言われている。そこでは創6：17と同じ動詞גָּוַע（gāwaʿ）「息絶える」が使われており，すべての動物が死滅することが言われている。

60　創7：15 = 3人称複数，創7：16 = 複数分詞 + 3人称複数。

最初，創 6：3 は人の霊についてのみ言われていたが，創 6：17，7：15 では人間と動物の息（霊）について述べられている。ただ，両者とも，肉との関係で，肉に内在する生命の原理としてのルーアハが強調されていると考えられる。

Ⅲ　第八の災いにおける東風（rûᵃḥ qāḏîm）と西風（rûᵃḥ-yām）—出 10：13（エロヒスト）と出 10：19（ヤーヴィスト）—

(1) 出エジプト記 10 章 13 節

וַיֵּט מֹשֶׁה אֶת־מַטֵּהוּ עַל־אֶרֶץ מִצְרַיִם׃ וַיהוָה נִהַג רוּחַ קָדִים בָּאָרֶץ
כָּל־הַיּוֹם הַהוּא וְכָל־הַלַּיְלָה הַבֹּקֶר הָיָה וְרוּחַ הַקָּדִים נָשָׂא אֶת־הָאַרְבֶּה׃

「モーセがエジプトの地に杖を差し伸べると，主はまる一昼夜，東風を吹かせられた。朝になると，東風がいなごの大群を運んで来た」

①出 10：1-20 は「十の災い」の第八番目，「いなごの災い」を述べる箇所である。モーセとアロンがファラオの前から追い出されたあと，12 節で神はモーセに手をエジプトの地に差し伸べ，いなごを呼び寄せなさいと言われる。いなごがエジプトに災いをもたらすためである。13 節でモーセが神の言葉に従ってエジプトの地に杖を差し伸べると，神は東風を一昼夜吹かせられ，朝になると東風がいなごを運んで来るという事態が生じる。

②出 10：13 は以下のような 3 文節の構成となっている。

ⅰ）モーセはエジプトの地に（ʿal-ʾéreṣ）杖を差し伸べる（nāṭâ）

ⅱ）主は終日終夜，東風（rûᵃḥ qāḏîm）を地に（bāʾā́reṣ）吹かせられる（nāhag）

ⅲ）朝になると，東風（rûᵃḥ qāḏîm）がいなごを乗せ上げて来る（nāśāʾ）

第 1 文節の動詞 נָטָה（nāṭâ）「差し伸べる」は出 10 章では 4 回用いられている動詞で重要な意味を持っている。12-13 節は「いなごの災い」，21-22 節は「暗闇の災い」に於いてであり，どちらも最初に神がモーセに手を差し伸べるように命じられ，それに応じて次にモーセが実際に杖[61] を差し伸べることが言われている。

第 2 文節ではモーセの行動に応じて今度は神が行動をおこされるとい

うことが記されている。神が東風を終日終夜「吹かせられる」נָהַג（nāhag）[62]。その結果，第3文節では風が主語となり，いなごを運んで来ることになる。出10:13では，地が2回[63]，東風が2回，前置詞אֵת（'ēt）「～を」が2回[64]，כָּל「すべての」が2回使われている。

③רוּחַ קָדִים（rûᵃḥ qāḏîm）「東風」

出10：13で「東風」（rûᵃḥ qāḏîm）は2回用いられている。最初は神が主語となり，東風を吹かせる。次いでは東風が主語となって，いなごを運んで来るという展開においてである。רוּחַ קָדִים（rûᵃḥ qāḏîm）は「東の風」という具体的な自然現象の東からの風をさしている。しかしながら，それは単なる気象学的な風としてではなく，神の意思をあらわす使命を帯びた風として吹くものである。

東風は旧約聖書中，東西南北の風の中で一番多く出て来る風である[65]。rûᵃḥ「風」＋（haq）qāḏîm「東」の合成語として，出10：13，14：21，エレ18：17，エゼ17：10，19：12，27：26，ヨナ4：8，詩48：8[66]に見出される。これらの箇所の中で，東風はほとんどの場合，神の裁き，そしてそれを具体的にあらわす災厄として出て来る[67]。エレ18：17では「東風のように，わたしは彼らを敵の前に散らす」と神の力が比喩的に表現されている。植物が東風で枯れることはエゼキエル書の2

61　出10：13には手ではなく，杖と記されている。

62　この動詞は強意形（piel）で「導く」を意味し，神を主語として，出10：13以外に申4：27，28：37，イザ63：14，詩48：15，78：26，52で用いられている。詩78：26では東（風）を送り−動詞はנָסַע I（nāsaʿ）の使役形−と並行し，南（風）にこの動詞の強意形が使われている。他にヤコブを主語として創31:26，憐れみ深い方を主語としてイザ49:10に見出される。出14：25も強意形で神が主語ではあるがその意味は異なる。

63　第1文節で前置詞は「～の上に」，第2文節では「～において」と異なる。

64　第1文節は「杖を」，第3文節は「いなごを」となっている。

65　他に創41：6，23，27，イザ27：8，ホセ12：2(1)，13：15，詩78：26，ヨブ15：2，27：21，38：24参照。また，砂漠の風も東風を意味する（エレ13：24）。他にエレ4：11，ホセ13：15（主の東風），ヨブ1：19参照。東風はハムシム（＝50），シロッコ（Vg. ventus durissimus）。C. Cannuyer, "VENT", *Dictionnaire Encyclopédique de la Bible*（Brepols 1987）1300頁参照。

66　H-J. Fabryは詩48：8［7］を［text uncertain］とする。前掲書380頁。

67　但し，出14：21の東風はイスラエルの民にとっては救いの風である。

箇所で言われている。「東風が吹きつけたなら／しおれてしまわないだろうか。その芽を出した場所で，しおれるであろう」（エゼ 17：10）。「東風はその実を枯らし／強い枝はもぎ取られて枯れ／火がそれを焼き尽くした」（エゼ 19：12）。また，海の中で東風によって遭難することが，エゼキエル書と詩編で述べられている。「漕ぎ手がお前を大海原に漕ぎ出したが／東風がお前を打ち砕いた／海の真ん中で」（エゼ 27：26）。「東風に砕かれるタルシシュの船」（詩 48：8）。人間に対しての直接の東風はヨナ書で語られている。「日が昇ると，神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられた」（ヨナ 4：8）。

出 10：13 でも以上と同様の意味合いで，東風はエジプトに災い（いなご）をもたらすものとして神が吹かせられた風として登場する。ただ，それにはまずモーセが杖を差し伸べるという象徴的な行為が必要である[68]。

(2) 出エジプト記 10 章 19 節

וַיַּהֲפֹךְ יְהוָה רוּחַ־יָם חָזָק מְאֹד וַיִּשָּׂא אֶת־הָאַרְבֶּה וַיִּתְקָעֵהוּ יָמָּה סוּף
לֹא נִשְׁאַר אַרְבֶּה אֶחָד בְּכָל גְּבוּל מִצְרָיִם׃

「主は風向きを変え，甚だ強い西風とし，いなごを吹き飛ばして，葦の海に追いやられたので，エジプトの領土全体にいなごは一匹も残らなかった」

①モーセが杖を差し伸べ，主が東風を吹かせられたことによっていなごが運び込まれ，いなごはエジプト全土を覆う（出 10：14）。ファラオは急いでモーセとアロンを呼んで赦しを乞い，神に祈ってくれと頼む（17 節）。そこでモーセは主に祈願する（18 節）。すると主は風向きを変えられ，大変に חָזָק（ḥāzāq）「強い」[69] 西風を吹かせられたので，風はいなごを נָשָׂא（nāśā’）「吹き上げ」[70]，葦の海の方に追いやり，いなごは一匹もいなくなるという事態になる。19 節の西風（海の風）は 13 節の東風

---

68 モーセのこうした象徴的行為については，L. Ska，前掲書 109-110 頁参照。

69 これは形容詞であるが，続く 20 節では神がファラオの心を חָזַק（ḥāzāq）「かたくなにする」と，形容詞「強い」（ḥāzāq）と同根の動詞が使われている。

が災いをもたらすものであるのと反対に，災いを取り除く恵みの風として出て来る。

②出 10：19 は以下のような 4 文節の構成となっている。

ⅰ）主は大変に強い西風（rûḥ^{a}ḥ-yām）に変え（hāpak），

ⅱ）いなごを吹き上げ（nāśā'），

ⅲ）葦の海の方に（yā́mmā^{h} ssûp̄）追いやられ（tāqa'），

ⅳ）エジプトの全領域にいなごは一匹も残らなかった。

第 1 文節で，神は「大変に強い」と形容されている海の風（rûḥ^{a}ḥ-yām），すなわち西風に風向きを変えられる。14 節では東風に נָהַג（nāhag）「導く」という動詞が使われていたが，19 節では西風に הָפַךְ（hāpak）「向きを変える」という動詞が用いられている[71]。第 2 文節ではその風がいなごを吹き上げることが言われ[72]，第 3 文節ではいなごを葦の海の方へ תָּקַע（tāqa'）「追いやる」ということが述べられる。最後に結果として，エジプトの全領域にはいなごが一匹も残らなかったということになる。14-15 節で言われていた災い，すなわち，いなごがエジプト全土にのぼり，エジプトの全領域（14 節）にとどまったので，エジプト全土のどこにも緑のものは何一つ残らなくなった（15 節）というのとちょうど逆の事態になるのである[73]。

③רוּחַ־יָם（rûḥ^{a}ḥ-yām）「西風」[74]

旧約聖書ヘブライ語で「西」は יָם（yām）「海」という単語であらわされることが大部分であり[75]，西風と訳される語も直訳すれば海の風である。海からの風は清涼な風をもたらし，雨をもたらす。旧約聖書の中

---

[70] この動詞は，17 節ではファラオが過ちを「許してくれ」（nāśā'）と頼むときに使われている。

[71] 出 14：5 ではこの動詞のニファル形（nifal）がファラオとその家臣たちの考え（心）を「一変する」という意味で使われている。

[72] 動詞は נָשָׂא（nāśā'）「上げる」。但し，動詞は男性 3 人称単数形。主が主語とも取れる。

[73] 但し，「残る」という動詞は原語では異なる。15 節は יָתַר（yātar），19 節は שָׁאַר（shā'ar）−この動詞は出 10：26 でも使われている−。

[74] ἄνεμον ἀπὸ θαλάσσης「海からの風」（LXX），ventum ab occidente「西からの風」（Vg）。

で西風が出て来ることは少ないが，西風は恵みをもたらすものとして使われている。民 11：31 では「さて，主のもとから風が出て，海の方からうずらを吹き寄せ，宿営の近くに落とした。うずらは，宿営の周囲，縦横それぞれ一日の道のりの範囲にわたって，地上二アンマほどの高さに積もった」とあり，ここでは西風とは直接には言われていないが，「主から」מֵאֵת יְהוָה（mēʾēṯ yhwh），「海から」מִן־הַיָּם（min-hayyām）の「風」が間接的に西風を言いあらわしている[76]。荒れ野でイスラエルの民が食料がないと不満の声をあげたため，主は風によってうずらを送られるのである。出 10：19 では西風がいなごを吹き上げ，災いを取り除き，民 11：31 では海からの風（西風）がうずらを運んで来て，恵みをもたらすという違いがあるが，どちらでも西風は恵みの風として吹いている[77]。

まとめ–出 10：13 と出 10：19–

東風＝ נָהַג（nāhag）「吹かせる」→ נָשָׂא（nāśāʾ）「吹き上げる」　地
西風＝ הָפַךְ（hāpak）「変える」→ נָשָׂא（nāśāʾ）「吹き上げる」
　　תָּקַע（tāqaʿ）「追いやる」　海

出 10：13 では，まずモーセが神の言葉にしたがってエジプトの地に杖を差し伸べる。そうすると神が東風を吹かせられ（nāhag），その東風はいなごを吹き上げて来る（nāśāʾ）。エジプトに災いがもたらされたわけである。かくして，エジプト全土に緑のものは何一つ残らなくなるという結果になる。

他方，出 10：17 以降ではファラオがもう一度だけ過ちを赦してもらいたい（nāśāʾ），あなたたちの神，主に祈願してもらいたい（ʿātār）との願いにしたがって，モーセが主に祈願する（ʿātār）と，今度はモーセ

---

[75] 他に，עֶרֶב（ʿereb）「夕」からの派生語 מַעֲרָב（maʿărāb　詩 75：7，103：12，107：3 等），אַחַר（ʾaḥar）「後」からの派生語 אַחֲרוֹן（aḥārôn　申 11：24，ヨエ 2：20 等）などが「西」をあらわす。

[76] 動詞 נָסַע I（nāsaʿ）「出て行く」は詩 78：26 では東（風）に用いられていたが，ここでは西風に使われている。

[77] 王上 18：45 の風も西風と考えられる。H-J. Fabry，前掲書 380 頁参照。

の行為なしに，直接神が非常に強い[78]海からの風（西風）に風向きを変え（hāpak），いなごを吹き上げ（nāśāʾ），葦の海へと追いやられる。海からの風は葦の海の方へ吹く。かくして，エジプトの全領土にいなごは一匹も残らなくなるという事態になる。

このように，出10章の東風と西風は，災いをもたらす風と災いを取り去る風として，正反対の意味で用いられているのである。

Ⅳ　葦の海におけるルーアハ
—出14：21（祭司資料）と15：8（ヤーヴィスト？）—

(1) 出エジプト記14章21節

וַיֵּט מֹשֶׁה אֶת־יָדוֹ עַל־הַיָּם וַיּוֹלֶךְ יְהוָה אֶת־הַיָּם בְּרוּחַ קָדִים עַזָּה כָּל־הַלַּיְלָה וַיָּשֶׂם אֶת־הַיָּם לֶחָרָבָה וַיִּבָּקְעוּ הַמָּיִם׃

「モーセが手を海に向かって差し伸べると，主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので，海は乾いた地に変わり，水は分かれた」

①出14章にはイスラエルの民がエジプトから脱出するために葦の海を通過してゆく物語が記されている。神の最初の言葉（1-4節）のあと，エジプト軍がイスラエルの民に追い迫るので，イスラエルの民は指導者モーセに文句を言う。それに対してモーセは民に主からの救いがあることを述べる。神は再度モーセに語られ（15-18節），彼に杖を高く上げ，手を海に向かって差し伸べて海を二つに分けなさいと言われる。そこでモーセが海に向かって手を差し伸べると，主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返され，海は乾いた地に変わり，水は分かれ，イスラエルの人々はその乾いたところを進んで行くことになる。しかし，それでもエジプト軍は追い迫って来る。そこでさらに神はモーセに海に向かって手を差し伸べなさい。そうすれば水がエジプト軍の上に流れ返るであろうと言われ（26節），実際，そのようになってイスラエルの民は無事に葦の海を通過してゆくということになる。

出14章で主の言葉は3回，1-4節（主は語られた），15-18節（主は

---

[78]「非常に強い」という形容は東風（出10：13）にはない。

言われた），26 節（主は言われた）にあり，2 回目（16 節），3 回目（26 節）の神の言葉には「手を海に向かって差し伸べなさい」が繰り返し述べられている。それに対応するモーセの行為が 21 節，27 節に記されている[79]。

16 節　杖を上げ，手を海に向かって差し伸べなさい。

21 節　モーセが手を海に向かって差し伸べると，

26 節　手を海に向かって差し伸べなさい。

27 節　モーセが手を海に向かって差し伸べると，

②出 14：21 には，出 14：16 の神の言葉に応じるモーセの行為が，以下のように 4 文節で書き記されている。

ⅰ）モーセは海の上に（ʿal-hayyām）手を差し伸べた（nāṭâ）。

ⅱ）主は強い東風で一晩中海を（ʾeṯ-hayyām）行かせた（hālak）。

ⅲ）（主は）海を（ʾeṯ-hayyām）乾いた地にした（śûm）。

ⅳ）水（hammā̆yim）は分かれた（bāqaʿ）。

すでに見たように，動詞 נָטָה（nāṭâ）「差し伸べる」は出 10 章では 4 回，主→モーセ（エジプトの地の上に），主→モーセ（天に）の組み合わせで出て来ていたが，出 14 章においても 4 回，主→モーセ（海の上に），主→モーセ（海の上に）の組み合わせであらわれる[80]。

モーセが手を海の上に差し伸べると，神は強い東風で海を הָלַךְ（hālak の使役形）「行かせる」。ここでは創 8：1 の（ʿăbar）「吹き渡らせる」，出 10：13 の（nāhag）「吹かせる」とは違い，動詞 הָלַךְ（hālak）「行く」の使役形（hif）「行かせる」が使われている[81]。エゼ 32：14 には「そのとき，わたしはその水を澄ませ／流れを油のように静かに流れさせると／主なる神は言われる」とあり，「流れさせる」と訳された動詞が הָלַךְ（hālak）「行く」の使役形である。神は強い東風でもって海を追いやられたので，海が乾いた地になったということである。出 10：13

79　言葉とルーアハの関係は，天地創造（創 1：2-3）においてもある。J. L. Ska，前掲書 108 頁参照。

80　この動詞は出エジプト記において重要な意味を持っている。7:5，19，8：1，2，12，13，9：22，23 他参照。

81　הָלַךְ（hālak）「行く」の使役形（hif）は旧約聖書中 44 回あり，神が主語としては 23 回。

では東風がいなごの大軍を運んで来る，すなわちエジプト全土に災いをもたらすと言われているが，出 14：21 の東風は出 10：13 同様にエジプト軍にとっては災厄の風であるが，イスラエルの民にとっては恩恵の風である。

ここで「一晩中」風が吹いたと説明されているが，この語は出 10：13 でも使われている[82]。このように多くの単語の用法から，出 14 章の葦の海の通過は，出 10 章のいなごの災いの記事と神学的に深いつながりがあることがわかる。

第 3 文節では海が חֲרָבָה（ḥărābâ）「乾いた地」[83] に変わると述べられている。創 7：22 の洪水物語の箇所では，「乾いた地の（beḥārāḇāʰ）すべてのもののうち，その鼻に命の息と霊のあるものはことごとく死んだ」と洪水との対比で陸上の動物の死が言われている。また，ヨシュ 2：10 では「あなたたちがエジプトを出たとき，あなたたちのために，主が葦の海の水を干上がらせた（yābēsh）」と言われ，動詞 יָבֵשׁ（yābēsh）「干上がらせる」が葦の海との関係で使われているが，ヨシュ 3：17 では名詞 חֲרָבָה（ḥărābâ）「乾いた地」（新共同訳では「川床」）が用いられている。「主の契約の箱を担いだ祭司たちがヨルダン川の真ん中の干上がった川床（beḥārāḇāʰ）に立ち止まっているうちに，全イスラエルは干上がった川床（beḥārāḇāʰ）を渡り，民はすべてヨルダン川を渡り終わった」。同じヨルダン川の話は王下 2：8 にもあり，「エリヤが外套を脱いで丸め，それで水を打つと，水が左右に分かれたので，彼ら二人は乾いた土の上（beḥārāḇāʰ）を渡って行った（ʿābar）」と，葦の海，ヨルダン川の関係で「乾いた地」が出て来る[84]。しかしながら，これらの箇所では風につ

---

[82] 但し，出 10:13 では「一晩中」だけでなく，「一日中」も書かれている（終日終夜）。

[83] 創 7：22，出 14：21，ヨシュ 3：17，17，4：18，王下 2：8，エゼ 30：12，ハガ 2：6 参照。同義語に יַבָּשָׁה（yabbāsha）があり，同じ出 14 章に 3 回（16，22，29 節），15 章に 1 回（19 節）出て来る。その他には創 1：9，10，出 4：9，ヨシュ 4：22，イザ 44：3，ヨナ 1：9，13，2：11，詩 66：6，ネヘ 9：11 参照。

[84] 他にも，ナイル川を干上がらせ，乾いた地（ḥāʿrāḇāʰ）にする話がエゼ 30：12 にあり，ハガ 2：6 では海と陸（ḥāʿrāḇāʰ）の対立が述べられている。

いての言及はない。

③出 14：21 では「海」が 3 回出て来る。最初はモーセが海の上に（ʿal-hayyām）手を差し伸べ，次にそれに応じて神が海を（ʾeṯ-hayyām）強い東風でおしやり，海を（ʾeṯ-hayyām）乾いた地に変えるという順においてである。そして最後に海の「水」が「分かれる」（bāqaʿ のニファル形）と結論づけられる。この動詞のニファル形は「ノアの生涯の第六百年，第二の月の十七日，この日，大いなる深淵の源がことごとく裂け（bāqaʿ）天の窓が開かれた」（創 7：11）と洪水物語の中でも使われている。また，出 14:16 の「海を二つに分けなさい（bāqaʿ）」という神の言葉の中ではそのカル形が用いられている[85]。ただここでは風については言われていないが，実際には出 14：21 で述べられているように，「東風」が海を追いやり，その結果，水は分かれるのである。

(2) 出エジプト記 15 章 8 節

וּבְרוּחַ אַפֶּיךָ נֶעֶרְמוּ מַיִם נִצְּבוּ כְמוֹ־נֵד נֹזְלִים קָפְאוּ תְהֹמֹת בְּלֶב־יָם׃

「憤りの風によって，水はせき止められ／流れはあたかも壁のように立ち上がり／大水は海の中で固まった」

①出 15 章 1-18 は「主に私は歌おう」で始まる「海の歌」（勝利の歌）のペリコペーである。エジプトからの脱出の最大の事件，葦の海の通過が出 14 章では散文で書かれているのに対し，出 15 章では詩文で書かれている。両者には，内容的に対応する用語や同じ単語が使われているが，出 14：21 で言われている「東風」は，出 15：では単に「風」（あるいは息）とのみ記されている。

②「海の歌」の中の 5-8 節は内容的にまとまった詩の一部分を形成している。

---

[85] בָּקַע（bāqaʿ）「分かれる」のカル形で神を主語として水と関係する箇所は，他に士 15：19，イザ 48：21，63：12（海を二つに分け），詩 74：15，78：13，ネヘ 9：11。そのうち，イザ 63：12（海を二つに分け），詩 78：13（海を開いて），ネヘ 9：11（海を二つに裂き）の 3 箇所は出 14 章と特に関係する。ニファル形で神を主語として水と関係する箇所はイザ 35：6 である。

5節　深淵（tᵉhôm）が彼らを覆い／彼らは深い底に（bᵉ）石のように（kəmô）沈んだ。
6節　主よ，あなたの右の手は力によって輝く。主よ，あなたの右の手は敵を打ち砕く。
7節　あなたは大いなる威光をもって敵を滅ぼし／怒りを放って，彼らをわらのように焼き尽くす。
8節　憤りの風によって，水はせき止められ／流れはあたかも壁のように（kəmô）立ち上がり / 大水（tᵉhôm）は海の中で（bᵉ）固まった。

ⅰ）5節の תְּהוֹם（tᵉhôm）「深淵」[86]，כְּמוֹ（kəmô）「～のように」，前置詞 בְּ（bᵉ）「～の中に」の3語は8節において再度出て来て，5節と8節の תְּהוֹם（tᵉhôm）「深淵＝大水」，「石のように」（5節）と「壁のように」（8節），「深い底に」（5節）と「海の真中に」（8節）とが対応している。また，5節の動詞「沈む」と8節の動詞「立ち上がる」が対立した意味を持ち，これらの同語，同義語，対立語などによって5節と8節が文学的な枠組を形成しているということがわかる。

ⅱ）5節前半の תְּהוֹם（tᵉhôm）「深淵」は，後半の מְצוֹלָה（mᵉṣôlâ）「深い底」と同義語であり[87]，5節前半の動詞「覆う」と，後半の動詞「沈む」は並行語である。

6節は前半と後半がそれぞれ「主の右手」ではじまり，並行句となっている。そして，6節の後半は7節の前半へと連鎖して繋がってゆく。動詞で言えば，6節後半の רָעַץ（rāʻaṣ）「打ち砕く」と7節前半の הָרַס（hāras）「滅ぼす」，名詞（分詞）で言えば，6節後半の אֹיֵב（ʼāyab）の分詞「敵」と7節前半の קוּם（qûm）の分詞「敵」が同義語として結びついている。

7節前半の前置詞 בְּ（bᵉ）「～の中に」は8節前半にもあり，「大いなる威光をもって（bᵉ）」（7節）と「憤りの風によって（bᵉ）」（8節）は同義的な意味を持つものと考えられる。7節の קוּם（qûm の分詞形）「立

---

[86]　天地創造とノアの洪水物語においてもこの単語は出て来る。創1：2，7：11，8：2参照。
[87]　ヨブ41：23，24参照。

つ→敵」と 8 節の נָצַב（nāṣab のニファル形）「立つ」は同義的な動詞であり，7 節後半の חָרוֹן（ḥārôn）「怒り（の熱）」と 8 節前半の אַף（'ap）「怒り」は同義語であって，7 節から 8 節へかけても継続性がある。

このように，出 15：5-8 は表現の上からも，内容の上からも，緊密な構造連関を持つ詩文であるということが言える。

③「憤りの風」あるいは「鼻の息」と訳される "ûḇərûᵃḥ ʾappeʸḵā" の語句がある出 15：8 は，各文節 4 語から成る 3 文節の 12 語で構成されている。

i）憤りの風（鼻の息）によって（ûḇərûᵃḥ ʾappeʸḵā），水はせき止められ（ʿāram），

ii）流れはあたかも壁のように立ち上がり（nāṣab），

iii）大水（tᵉhôm）は海の中で固まった（qāpāʾ）。

同義語の「水」，動詞 נָזַל（nāzal）の分詞形「流れ」，「海」はすべて各文節の最後に位置しており，ほかに関連語の「大水」が第 3 文節に出て来る。以上の 4 単語によって，8 節では水が非常に強調されているということがわかる。動詞はすべて 3 人称複数形で，עָרַם I（ʿāram のニファル形），「せき止められる」[88]，נָצַב（nāṣab）「立つ」，קָפָא（qāpāʾ）「固まる」の順に出て来る。

④ところで，出 15:8 で問題となるのは，「あなたの鼻の息によって」（口語訳）とも「憤りの風によって」（新共同訳）とも訳される וּבְרוּחַ אַפֶּיךָ（ûḇərûᵃḥ ʾappeʸḵā）をどのように理解するかということである。

ルーアハはすでに見てきたように多義的な単語である。ただここでは，風あるいは息が訳として考えられるであろう。それは次の אַף（'ap）とも関係し，この語が鼻とも怒りとも訳されるので[89]，それとの組み合せによって口語訳，あるいは新共同訳のような翻訳が考えられるわけである。七十人訳（διὰ πνεύματος τοῦ θυμοῦ σου）やヴルガタ訳（et in spiritu furoris tui）は אַף（'ap）を「激情，怒り」と解釈している。たし

---

88 この動詞は hapax legomenon である。

89 אַף（'ap）は旧約聖書中，「鼻」の意味で 25 回，「怒り」の意味で 210 回使われている。怒りのうち，大部分は「神の怒り」（168 回）で，「人間の怒り」（42 回）の方が少ない。G. Sauer, "אַף 'af Zorn" *THAT*. Band I, 221 参照。

かに，前節の7節には חָרוֹן（ḥārôn）「あなたの怒り（の熱）」があり，それとの関連からすれば אַף（ʾap）を「怒り」と解することが出来るわけである[90]。また，7節の並行句「大いなる威光をもって（b^e^）」からも「憤りの風によって（b^e^）」（8節）と訳すのがよいのではないかと考えられる[91]。

おわりに

以上，ルーアハの用法を原初史（創造と再創造）と救済史（エジプト脱出）に限って考察し，その意味を調べてみた。そこからわかったことは，これらの箇所でのルーアハは特に「水」と関係するということである[92]。天地創造において，神のルーアハ（霊）はまず「水の上に」働きかけ，それから「光あれ」と言われて創造行為がはじまる。ノアの洪水はまさに地上に水が氾濫することであるが，神はノアと動物たちを心に留め，「地の上に」ルーアハ（風）を吹き渡らせ，その結果，水は引いてゆくことになる。これは救済であると同時にあらたな創造である。この再創造においてもルーアハは水に関与する。洪水はすべての肉なるものを滅ぼすことであるが，肉なるものはそのうちに命のルーアハ（霊・息）を持っている。それによって肉なるものは生きるのであり，ルーアハは人間や動物の肉に内在する生命の原理であると言うことができる。

90　ヨブ4：9には「彼らは神の息によって（מִנִּשְׁמַת אֱלוֹהַּ minnišmaṯ ʾĕlôᵃh）滅び / 怒りの息吹によって（וּמֵרוּחַ אַפּוֹ ûmērûᵃḥ ʾappô）消えうせる」とある。出32：12では מֵחֲרוֹן אַפֶּךָ（mēḥărôn ʾappéḵā）「燃える怒り」（新共同訳），民25：4では חֲרוֹן אַף־יְהוָה（ḥărôn ʾaṗ-yhwh）「主の憤り」（新共同訳）と言われている。

91　「恐るべきもの」（11節），「震える」（14節），「おどろく」（15節），「わななく」（15節），「恐れとおののき」（16節）なども「怒り」の感情との関連を示す。他方，אַף（ʾap）を「鼻」とするのは神を擬人的に見るわけであるが，6，12節で主の「右手」，16節で「腕」が言われており，それとの関連で可能である。現代の諸外国語訳の多くは「鼻の息」と訳している。出15：10の נָשַׁפְתָּ בְרוּחֲךָ（nāšáṗtā ḇərûḥăḵā）「あなたが風（息）を吹くと」についてはここではふれない。

92　「風と水」（ルカ8：25），「水と霊」（ヨハネ3：5）等参照。

エジプト脱出に際し，神は第八番目の災いにおいて，東風（東のルーアハ）によっていなごをエジプト全土にもたらせられるが，モーセの祈願によって風向きを変えて西風（海のルーアハ）とし，その風でもっていなごを葦の海の方に追いやられる。気象の風もまた神からの使命を果たすものである。葦の海の通過においては，神はいなごをもたらしたと同じ東風をもって，今度は海をおし返される。古い「海の歌」は東風とは言わず，敵をおののかせる「怒りの風」という表現でもって水をせき止める。ここでもルーアハは水に働く神の力をあらわしている。すべてのものごとを変化させるのは神のルーアハであり，救いは目には見えない神からの力によって達成される。

このように，原初史と救済史において働く神のルーアハはその神学的用法において深く結びついていると結論づけることができる。